

【特集・第 57 回研究例会】

公共図書館と音楽

【目次】

特集・第 57 回研究例会 (2014 年 11 月 29 日)	
大阪府吹田市立図書館における音楽資料の現在	
森万由美	1
吹田市立図書館の録音資料 MARC について	
田島克実	5
日本支部第 57 回例会の企画について	岸本宏子 9
傍聴記	栗林あかね・大和紘子 12

大阪府吹田市立図書館における 音楽資料の現在

吹田市立中央図書館

総務・企画グループ資料管理担当

森 万由美

1. 吹田市の概要

吹田市は、大阪府の北部に位置し、大阪市、豊中市、箕面市、茨木市及び摂津市と接する、東西 6.3km、南北 9.6km、面積 36.09 km²の市です。市制施行は昭和 15 年、平成 26 年 10 月末時点で人口は約 36 万人です。

1889 年 (明治 22 年)、大阪麦酒株式会社 (現アサヒビール) が工場を開設、1923 年 (大正 12 年) には、当時の国鉄吹田操車場が開業したことから、「ビールと操車場の町」といわれます。1960 年代には千里ニュータウンが建設され、1970 年 (昭和 45 年) に日本万国博覧

会 (EXPO'70) が開催されました。この翌年、現在の吹田市立中央図書館が完成しました。また、現在、6 つの鉄道と 15 の駅がある「鉄道のまち」で、陸上運輸の面では吹田ジャンクションを有し、交通の便に優れています。文教面では大阪大学、関西大学、国立民族学博物館等のある「大学・研究機関のまち」であり、国立循環器病研究センター、大阪大学医学部附属病院、済生会吹田病院等のある「医療機関のまち」でもあります。また、サッカー J リーグ「ガンバ大阪」のホームタウンで、図書館では連携行事「読書でガンバ」(子ども向け行事)を毎年行っています。

2. 吹田市立図書館の概要

(1) 沿革 (視聴覚資料 (AV) サービスを中心に)

大正 15 年 (1926 年) 「吹田町立図書館」と称し、吹田町立第一尋常小学校校内に開設
昭和 59 年 (1984 年) 電算化 (全館オンライン) による業務開始

平成 5 年 (1993 年) 吹田市立さんくす図書館供用開始。同館において視聴覚資料 (CD、カセット、ビデオ、LD) の館内視聴及び貸出 (LD を除く) を開始。

平成 13 年 (2001 年) インターネットによる蔵書検索サービス等開始

平成 16 年 (2004 年) 吹田市立千里山・佐井寺図書館供用開始

平成 22 年 (2010 年) 毎日開館実施

平成 22 年 (2010 年) 視聴覚資料の共通返却を実施

平成 23 年 (2011 年) 視聴覚資料の予約受付開始

平成 23 年 (2011 年) 吹田市立子育て青少年拠点夢つながり未来館山田駅前図書館供用開始

平成 24 年 (2012 年) 千里図書館移転・供用開始

平成 25 年 (2013 年) 吹田市立千里丘図書館供用開始

(2) 蔵書及び利用状況 (平成 25 年度)

登録者数 116,664 人 (内市内 110,608 人)

市内在住登録率 30.72%

蔵書数 (図書 / 雑誌 / AV) 974,457 冊 / 33,628 冊 / 63,226 点

市民 1 人当たりの蔵書数 2.71 冊

貸出数 (図書・雑誌 / AV) 3,207,920 冊 / 326,429 点

市民 1 人当たりの貸出点数 9.68 点

予約数 (図書・雑誌 / AV) 754,905 件 / 106,692 件

資料費 (図書 / 雑誌・新聞他 / AV) 68,555,000 円 / 13,267,000 円 / 5,983,000 円

購入数 (図書 / 雑誌 / AV) 43,820 冊 / 950 タイトル / 1,291 点

3. 公共図書館とは

吹田市立図書館における音楽資料の考察の前に、「公共図書館」とは何か、その目的やサービス内容はどのようなものか、を整理します。

図書館の種類は、国立国会図書館、公共図書館、学校図書館、大学図書館、専門図書館、その他の図書館 (点字図書館、病院図書館など) に分けられます。そのうち、公共図書館は「図書館法」第 2 条で「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の



森 万由美氏

利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人が設置するもの」と規定されています。

また、「ユネスコ公共図書館宣言」(1994 年)では、公共図書館のサービスは、「年齢、人種、性別、宗教、国籍、言語、あるいは社会的身分を問わず、すべての人が平等に利用できるという原則に基づいて提供される」とされています。つまり、「誰もがくらしの中で必要とする情報資源を公的に入手し、利用できる環境を保障する」のが公共図書館の役割です。

これは、憲法第 21 条「表現の自由」に基づく「知る権利」、憲法第 25 条「社会的生存権」(健康で文化的な最低限度の生活を営む権利)、憲法第 26 条「教育を受ける権利」を保障するものです。「教育を受ける権利」は、学校教育だけでなく、生涯学習を指すものであり、「教育基本法」第 12 条「社会教育の振興」で図書館の設置が明示されています。さらに、これを受けて、「社会教育法」で図書館が社会教育機関であることが明示されています。

「公共施設」という点からは、「地方自治法」で規定される『『公の施設』の設置と利用』の条文が公共図書館に適用されますが、各公共図書館の設置に関する具体的な内容は、各自治体

の条例・規則等で制定されます。

こうした法律等に基づいて、公共図書館では様々な利用者に対してサービスを提供しています。吹田市立図書館でも、貸出・予約・レファレンス、インターネットサービス（館内に利用者用端末設置）、CD・DVD視聴サービス、児童サービス（乳幼児と保護者、子ども、ヤングアダルト）、学校との連携、障がい者サービス、団体貸出、講座・講演会、図書館ホームページ等での情報発信、広域利用サービスなどを行っています。

4. 吹田市立図書館における音楽資料の現在

(1) 利用状況

平成25年度末のAV資料の所蔵数は全部で約63,000点、内音楽資料の所蔵数はCD約46,000点、カセット約2000点となっています。所蔵館は、現在6館です。

貸出は自動車文庫を除く全館・室で行っています。平成25年度の貸出数は、CD約21万点、カセット約1500点。

(2) 購入状況

平成25年度の購入点数は、CD約900点。視聴覚資料所蔵館が増えても、購入予算が増えず、厳しい状況が続いています。平成23年（2011年）に、視聴覚資料の予約サービスを開始したこともあり、全館の所蔵バランスを考慮して複本購入を抑え、資料費を有効に使えるよう、各館ごとの資料選定をやめ、全館での集中選書方式に変更しました。

(3) 選定方針

「吹田市立図書館視聴覚資料収集方針及び選定基準」（平成25年6月）において、「選定基準」として、「1. 録音資料（1）『ポピュラー（洋楽・邦楽）』『クラシック』『ジャズ』など音楽の他、落語や朗読、効果音など、市民の娯楽や教養および実用に資するものまで幅広く選定する。（2）定番となっている作品、音楽関連賞

受賞作など評価の高いもの、新聞および雑誌等での評価や話題性も参考に選定する。」としています。

(4) 選定から提供までの流れ

ジャンルごとの担当者が、全館分を選定し、年2～3回に分けて発注します。ジャンルは、J-POP、外国ポップス、ジャズ、クラシック、その他、に分けています。選定ツールは、「CDジャーナル」を基本に、「JaZZ JAPAN」「レコード芸術」など音楽雑誌や、利用者からのリクエストを参考に選定していますが、図書とは異なる選書の難しさがあり、また、毎年担当者が変わる状態で継続性が課題と考えています。

発注から納品、データ・装備のチェックは、全館分をまとめて中央図書館資料管理担当が行います。その後、各館へ配送し、各館で場所コードの変更等を行った後、利用者に提供できるようになります。資料の紛失が多いため、新着資料は書庫入れすることが多く、利用者の目に触れる機会が少ないという問題があり、ICタグを用いた図書館システムを導入（平成27年度予定）することで、無断持出を抑制し、開架資料を増やせるよう検討中です。

(5) 実際の利用

J-POP、外国ポップスなど、チャート上位の作品は図書館でも貸出・予約が多く、最近では、初音ミクなどのボーカロイドが中高生に人気があります。朗読、落語、謡曲などもリクエストが多いジャンルです。こうした幅広いジャンルへのニーズに対応するため、売れ筋のものばかりではなく、レンタルでは取扱いのないものや廃盤で購入できない資料のコレクションの蓄積があります。

レファレンスやリクエストにも対応しています。テレビ、ラジオなどで最近聴いた曲についての問合せなどの場合、うる覚えで訪ねてられることも多く、ネット情報も活用しながら検索します。楽譜の調査依頼も多いですが、ピア

ノ譜、ギター譜、合唱など曲名は同じでも要求はさまざまであり、また、同書名でも版違い、刷違いで収録楽曲が異なっている場合も多く、オンライン図書館蔵書検索システム（OPAC）での検索だけでは同定できないこともあり、最終的には直接棚を見て探すこととなります。

利用の上での一番の課題は、検索の難しさです。当館では CD マークについては、以前は NHK マーク、現在は Toccata マークを使用しているため、書誌割れも多く、表記が統一されていないため、同じタイトル・アーティストであっても、一度にヒットしない場合がよくあります。とくに、人名表記に関しては、一般的に使われる名称と、目録の統一形が異なることがあります。例えば、「アルゲリッチ」は、NHK マークでは統一形「アルヘリチ」となっていますが、これを知らなければ正しい結果が得られません。マークの種類によって、有効な検索方法が異なるため、検索語の選択などで、図書の検索とは違ったスキルが職員側に求められます。

最近では、利用者自身が OPAC で検索することが多いため、「検索しやすさ」が求められています。利用者から書誌割れに対する指摘を受けることも多く、年々高まる検索システムへの要求レベルへの対応が大きな課題となっています。

(6) 課題

最も重要な課題として、職員側の検索スキルの向上があります。たとえば、クラシック曲の作品番号から検索する方法を知っているかどうか、など、職員間でのスキルレベルの平準化がされていません。

資料選定については、選定ツールとして「CD ジャーナル」を使っていますが、オリコンチャート、国内外の受賞歴など、他の情報源を追っていないのが現状です。新譜だけでなく、名盤とされるタイトルの所蔵状況なども、選定



吹田市立中央図書館

の参考としていきたいと考えています。また、現在は年 2～3 回の発注のため、発売から利用者への提供までにかかり時間がかかっています。発注回数を増やして、新鮮なものを提供できるように、年間スケジュールの見直しが必要です。さらに、購入した資料の有効活用として、レコメンド等の情報発信をしていく必要があります。一部、Twitter での資料紹介を始めたところですが、現状では、担当者の仕事は選定で終わり、という意識があり、購入後の資料活用への意識が希薄です。

マーク情報の OPAC 開示についても、マーク情報をどこまで開示するかが検討課題です。録音年なども利用者にとって重要な情報ですが、すべての情報を OPAC に公開すると、情報量が多すぎ、却って利用者にとって分かりにくいものになってしまうため、慎重な検討が必要です。

5. まとめ

吹田市立図書館で最初に音楽資料の受入れを開始してから既に 21 年が経過し、現在、音楽資料の収集・提供は図書館利用者へのニーズに応えるためには不可欠のものとなっています。資料選定、検索スキル、情報発信を含めた資料活用などの課題に今後も取り組んでいきたいと思えます。

吹田市立図書館 <http://www.lib.suita.osaka.jp>

(もりまゆみ)

吹田市立図書館の録音資料 MARC について

—公共図書館における視聴覚資料—

株式会社トッカータ
田島 克実

昨年6月に岸本先生からご相談を頂きまして、IAML日本支部の設立主旨から現在の活動に至るまでのお話を聞きました。その中で「音楽ライブラリアンが、全国の公共図書館で活躍できたら素晴らしい」とのお言葉もあり、トッカータとしても、お手伝いができるのかも、と考えました。8月から少しずつ打合せを重ね、発表、報告に応じて頂ける図書館にご相談を持ちかけ、10月に吹田市立中央図書館 総務・企画グループに岸本先生と正式な依頼にお伺いさせて頂きました。

吹田市立図書館は、営業での交渉事においては弊社の対応が試されるシビアな面とともに、民間企業間では一般的な言葉や考え方が通じる大変フェアな図書館（自治体）と思っています。先程、森様の説明をお聞きしましたが、全国の公共図書館の中でも、視聴覚資料の専門性に留意した図書館と考えています。

吹田市は図書館数9館（分室2館含）、自動車文庫27で、視聴覚サービスありが6館。その内、弊社にて新館オープン受託が2館です。当初はCDの調達から、MARC / 典拠作成委託、装備加工を受託。現在は、各6館のMARC / 典拠作成、装備を単価契約で受託しています。現在、所蔵データベースの整合性を図り、検索機能を高めるため、トッカータMARC / 典拠クラウドサービスの導入を検討され、一括遡及更新用データの活用を目指しています。（検索対象CD 47,234件：発売番号 完全一致 82.25% . 2015/1/19 現在）

さて、本日私をご報告させていただきます内容は、業界サイドの事も多く、場合によっては非難されることも覚悟の上で、お聞き苦しい点多々あると思いますが、宜しくお願い致します。

公共図書館業界の参入企業について

派遣会社、レンタルリース会社、等々といった、そもそも図書館の為に起業した以外の会社参入の増加が目立ちます。結果、場合によっては運用のコストの見直しには役立つ場合もあるかも知れませんが、人材、視聴覚資料、システムの質の低下が気づかないうちに進行していると感じる場合があります。

指定管理制度等の導入も、効率的には優れている事も多いと考えますが、自治体、行政による、民間会社への価格競争を強要させる傾向は、図書館に限らず、あまりよい結果を生まない気がしています。

入札制度に関しましても、物品（CD、DVD、楽譜）調達では仕切り（価格）が明確ですので、基本的には定価販売した場合に限り利益の確保が可能です。委託の装備加工も、仮に1時間で3件の処理が可能な仕様であれば、少なくとも300円 / 1件の利益の確保が必要なわけです。

図書館システム、データベースの場合も入札の場合があります。システム、データベースの質を考えれば、弊社は辞退せざるを得ないわけであります。

図書館に携わる各会社、業者に利益が生まれない以上は、業界は疲弊する事とあいなります。

音楽資料用 MARC / 典拠について

公共図書館システムが、図書資料を主体に開発されている経緯もあり、視聴覚資料用MARC、典拠を有効活用するには困難な部分があります。近年、音楽資料用MARCをより活用したいと望まれる図書館も多くなってはきていますが、

システム、ベンダー間の説明、交渉には労力が必要です。数社の開発ご担当者を除き、システム側も音楽資料の扱いは苦手意識もあり対応できていない事も現実問題としてあります。FRBR、RDA の知識以前に、音楽資料の扱いについて興味も向上心も無いよう見受けられます。責任表示と個人・団体の件名標目の違いすらあやしい状態なのです。

以前、業界を代表する、指導的立場であるはずの日本図書館協会・映像事業部なる部署が映像資料の強引な販売ルート作りに励み、極めて劣悪なデータまでも頒布致しました（しかも有償です）。あたかも日本図書館協会のみが、販売を許諾されているかの如くの戦略で全国の公共図書館を啓蒙した結果、数十億に及ぶ売上を伸ばされた事はご存知だと思います。そもそも映像資料の著作権に詳しいはずの人材も確保されていたとは考えにくく、全くもって困ったものでした。2年前に、上記の事業部は破綻して存在していないのが幸いなことでありましょう。（現在も事業継承との内容で同様のサービスをされている会社もあるようですが。）図書館用の資料価格の設定も、いつのまにか曖昧になり、日本映像ソフト協会の邦画メーカー各社が基本としていましたセル（販売）価格の 200%から 300%により許諾とする、無償での個人貸出、上映価格も、現在では、10 倍の価格設定の作品も見受けられます。しかも、期中でのキャンペーン価格などとして、保証金を含むと称す価格がワゴンセール価格のごとくにお安くなる資料も少なくないのです。この事態は、資料費の予算確保の正当性、利用者の破損等による弁償時にも大きく影響が出てしまっているのです。一体、どういう事なのでしょう。加えて、録音資料の販売とデータ頒布までもが開始されました。MARC の質は言うまでもありません。（参照・次頁「Toccatà MARC / 日図協フォーマット準拠 DVD データ サンプル」比較）

音楽資料目録の典拠、MARC 作成には、調査も含めて、受注生産で且つ、工数（作業量）の係る処理である事への理解、協力が必要な場合も多いのですが、安易なデータ頒布により阻害され、価格、納期設定に最悪な影響が出る要因となりました。

人材の確保、育成について

短期間で音楽ライブラリアンの育成は出来ませんが、多くの資質と向上心のある人材が、図書館で働きたいと希望している現実もあります。MARC、典拠に関しては、頒布可能な成果物に達するまでには最低でも 3 年～5 年の経験が必要としますが、公共図書館だけではなく、民間でも即戦力に近い人材の確保は課題です。弊社に限らず、業界の関連会社はより多く、人材を採用、育成できるよう尽力せねばならず、環境の整備も怠ってはいけなさと考えます。そのためには、時間（費用）がかかっても質の高い提案を維持、継続し続けなければなりません。

今回は主に公共図書館についてでしたが、音楽資料を扱うすべての施設に対し、正しい指導力と指針を示す事のできる団体が必須と考えます。業界の T 社、N 社、O 社、K 社、M 社 また音楽資料専門販売 A 社や、弊社も含めて力を合わせる事も課題なのかも知れません。

グローバルスタンダードな共通仕様の音楽目録頒布の実現と、社会共通資本である MARC、典拠の作成、蓄積には、IAML、MLAJ の他、学会、研究会等の関連団体、大学とともに同じ課題に立ち向かう目的の同期をはかり、協力しあう事よりのみ、実現可能な将来と考えます。

弊社も微力ながら、お手伝いできれば嬉しく思います。

（たじま かつみ）

【参考・データ比較 Toccata Marc / 日図協フォーマット準拠 DVD データ】

Toccata MARC SaaS Edition (DVD)

*****ngm0 22***** 450

001 00 b014002426 ≠

002 00 gnm ≠

004 00 FXBR49945VR/MLC ≠

005 00 20140730160243 ≠

032 00 0 \$b20th Century Fox/Walden\$aFDR-49945\$cdisc ≠

032 01 0 \$b20th Century Fox/Walden\$aFXBR-49945\$container ≠

100 00 \$a20140730f2011 r y0jpn y ba ≠

101 00 2 \$aeng\$aipn\$jpna\$jeng ≠

102 00 \$aJP ≠

115 00 \$a015300001fdbaijhb001z1 zzb ≠

200 00 1 \$aThe chrosnicles of Narnia, the voyage of the dawn treader ≠

2A0 00 1 \$A ナルニア国物語, 第3章 アスラン王と魔法の島 \$a カニアクモガリダイ3ヨウアスランオトマナノシマ≠

2B0 00 \$A [東京] \$C 発売元: 20世紀 フォックス ホーム エンターテインメント ジャパン \$D [2011] ≠

215 00 \$A ヴィデオディスク1 (本編113分) \$C カラー \$D 12 cm. ≠

302 00 \$A DVD Video; 片面2層; MPEG-2; Dolby digital;

16:9, LB ビスタ・サイズ; NTSC ;

英語 5.1chサラウンド, 日本語 5.1chサラウンド; ハードコーティング仕様≠

304 00 \$A タイトルはディスクによる≠

304 01 \$A 日本語タイトルはディスクによる≠

300 00 \$A レンタル専用≠

302 01 \$A 言語: 英語, 日本語 (日本語・英語字幕) ≠

305 00 \$A 2011年劇場公開≠

304 02 \$A 監督: マイケル・アブテッド≠

3C2 00 \$A キャスト: ジョージ・ヘンリー, スキャンダー・ケインズ, ベン・バーズ, 他≠

330 00 \$A ナルニアの海を舞台に, ペベンシー兄妹とカスピアン王子たちが, ナルニアを悪から守る7本の魔法の
剣を探すため, 神秘の島々を巡る新たな冒険の旅へ繰り出していく≠

500 00 11 \$0u\$a ナルニア国物語, 第3章 アスラン王と魔法の島 \$N 映画

\$a カニアクモガリダイ3ヨウアスランオトマナノシマ \$n Iガ ≠

519 00 1 \$A 第3章, アスラン王と魔法の島 \$a ダイ3ヨウアスランオトマナノシマ \$zjpn ≠

519 01 1 \$A アスラン王と魔法の島 \$a アスランオトマナノシマ \$zjpn ≠

606 00 1 \$3a81019378\$7ba\$aNarnia (Imaginary place)\$vDrama\$7da\$a ナルニア (架空の場所) \$V 戯曲

\$7dc\$a カニアカクノバシヨ \$v キキョク≠

606 01 1 \$3a81019335\$7ba\$aBrothers and sisters\$vDrama\$7da\$a 兄弟姉妹 \$V 戯曲 \$7dc\$a キョウガイシマイ \$v キキョク≠

608 00 \$3a79015107\$7ba\$aFantasy films\$7da\$a 幻想映画 \$7dc\$a ゲンツウ Iガ ≠

608 01 \$3a79012655\$7ba\$aFilm adaptations\$7da\$A 映画翻案 \$7dc\$a イガ` ホアツ` ≠
608 02 \$3a79014399\$7ba\$aAnimated films\$7da\$A アニメーション映画 \$7dc\$a アニメ-シヨソ イガ` ≠
702 00 0 \$0x\$A アプテッド \$B マイケル \$F 1941- \$a ア`テツド` \$b マイケル \$f1941-\$420 ≠
702 01 0 \$3a81019424\$7ba\$aHenley\$bGeorgie\$7da\$A ヘンリー \$B ジョージー \$7dc\$a ヘンリー- \$b ジョ-ジ- \$425 ≠
702 02 0 \$3a81019432\$7ba\$aKeynes\$bSkandar\$7da\$A ケインズ \$B スキャンダー \$7dc\$a ケイズ` \$b スキャンダ- \$425 ≠
702 03 01 \$0x\$A バーンズ \$B ベン \$F 1981- \$a バ-ンズ` \$b ベン \$f1981-\$425 ≠
801 00 0 \$aJP\$bTOC\$c20140730\$grda ≠
830 00 \$atwo-dimensional moving image[rdacontent]; video[rdaedia]; videodisc[rdacarrier] ≠
900 00 \$a7S ≠

日本図書館協会 頒布フォーマット準拠作成サンプル (DVD)

1028454712

ナルニア国物語第3章/アスラン王と魔法の島

ナルニアモロガリ 第3巻 アスラン王と魔法の島

20世紀FOX

HE

20世紀フォックス

HE 2011301211312810 3 9

THE CHRONICLES OF NARNIA / THE VOYAGE OF THE DAWN TREADER

03

マイケル・アプテッド

マイケル ア`テツド`

25

クリストファー・マックアリー

クリストファー マックアリー

61

ジョージー・ヘンリー

ジョ-ジ- ヘンリー

53 20102

ルーシーとエドマンは従兄弟ユースチスと共に、光を奪われたナルニアを救うために冒険の旅へ出る

MMC

ムービー・マネージメント・カンパニー

FXBR49945 0000012500

映画-アメリカ

イガ` -アメリカ

ドラマ-ファンタジー・アドベンチャー

ドラマ-ファンタジー・アドベンチャー

日本支部第57回研究例会の企画 について

例会担当 岸本 宏子

【準備】

ひさしぶり —15年ぶりくらい?— に役員になり例会担当の役割を頂き、役員会議では今期1回目の例会で「公共図書館」を取り上げる提案をしました。役員会で歓迎されるトピックというより、「ま、1回ぐらいいいか」という雰囲気にも思えました。

そして私は、11月29日の日本支部第57回例会では、「伝えたいこと—公共図書館もIAMLにとって大切な仲間—について、必要なことがすべて伝わるようにしたい。さもないと、2度とチャンスは訪れないかも知れない」と思って企画しました。

まず、公共図書館から講師をお招きして音楽資料の現状を紹介して頂き、公共図書館の現状を知ることが、日本支部としては第一に大切なことだと考えました。トッカータの田島社長に依頼して、公共図書館の音楽資料整理の現状を知るために、同社が接触のある公共図書館の中から、参加して下さる館を探しました。最終的なご賛同を得られない場合が多かったのですが、大阪府吹田市公共図書館の中央図書館から良いお返事を頂きました。

【なぜ公共図書館か — 私の考え】

なぜ公共図書館を取り上げたかったかというと、IAMLが関わる図書館群の中で、日本支部では公共図書館が軽視されているように思えたからです。また、音楽資料を持つ日本のいろいろな図書館群の中で、公共図書館が一番困った状態にあるように思えるからでした。決して、公共図書館が一番大切な存在、とっているわ

けではありません。大学図書館も専門図書館も大切な存在です。しかし、置き去りにされている公共図書館を事例に取り上げることが、日本支部のあり方を再考する糸口になるかもしれないと思ったのです。IAML日本支部のこれまでの活動の方向が少し違っていたら、ずいぶん事情が違ったかも知れないと思ったからです。「なぜ困った状態になったか」「どうすれば困った状態から抜け出せるか」、これら2つのトピックをみなさんと相談したかったのです。

そのためには、「IAMLとはどのような組織なのか」「IAMLはどのような仕事をしてきたか」「公共図書館を『困らない状態』にするにはどのようなことが必要か」を考えた上で、「日本支部と公共図書館は、これらの経緯をよく知った上で、協働出来ないか」「音楽のある夢の公共図書館」の実現に向けて、「アイデアがみつからないか」について考える必要があると思いました。今回の例会では、その取っかかりが出来ればいいなあ、もしそうした雰囲気が出来れば、今回だけでなく、公共図書館についてかんがえるチャンスが、日本支部に生まれるかも知れない…。しかし日本支部が、今回だけで公共図書館についてのテーマを扱わないことになれば、どうなるだろうか…。それが私にとっての、この例会の意味でした。

プログラムを以下のようにしました。

【報告】 司会・岸本宏子

- ①大阪府吹田市公共図書館における音楽資料の現在 森 万由美 (吹田市立中央図書館 中央図書館総務・企画グループ資料管理担当)
- ②吹田市公共図書館の音楽資料書誌データについて 田島 克実 (㈱トッカータ)

【ディスカッション】 司会・岸本宏子

- ①導入：IAMLと公共図書館 音楽資料をめぐる過去・現在・未来

岸本宏子(昭和音楽大学)

②ディスカッション：どうすれば出来る？ 音楽のある夢の図書館

【当日】

公共図書館のお話しは森万由美氏に御願いし、私は IAML とその日本支部の役割についての確認をするための導入を担当し、まとめとして「公共図書館は IAML の仲間」「公共図書館と一緒に何が出来るか」と展開させたいと思っていました。そのための提案もひとつ準備していました。森万由美氏のお話しはよく練られ良くまとまっており、現状の問題点等も、打ち合わせたわけでもないのに、とても納得のいく指摘がされており、予定通りに終わりました。

続いてトッカータ社の田島氏が、公共図書館における音楽資料の扱いの傾向をご紹介下さり、吹田市公共図書館の音楽資料に関わるお仕事、良質なものであるということをお話いただきました。また、こうした公共図書館はまれであり、多くの公共図書館ではかなり問題がある（悲惨な？）状況であることも語って下さいました。

次は、私の「導入：IAML と公共図書館 音楽資料をめぐる過去・現在・未来」に続けて「ディスカッション：どうすれば出来る？ 音楽のある夢の公共図書館」と展開して終わるはずでした…。

私が取り上げなかったのは、もちろん公共図書館です。そして、公共図書館を糸口にして、あらためて日本の図書館の音楽資料が生かされるためには何が出来るのか、将来を考えるための参考として、これまでの歩みを共有したいと思いました。IAML と日本支部の役割を確認し合うためには、IAML 歴史とその日本支部歴史を踏まえた現状の把握が、将来を考える上で参考になると思ったからです。

これまで支部の活動にはあまり参加出来なかったけれど、本部の動きについていく努力を

欠かさないようにしていた私は、本部、あるいは本部とかかわりのある組織や人からの連絡や調整などを、言ってみれば、非公式に一手に引き受ける形になってしまっていたので、私しか知らない事実がかなりあるのです。

話の内容はかなり端折ったつもりだったのですが、話したいことが多すぎて、計画通りには進みませんでした。尻切れトンボの形で、しかも肝心の「ディスカッション：どうすれば出来る？ 音楽のある夢の公共図書館」にはたどり着けませんでした。導入をハンパに打ち切って、無理矢理に 2、3 のご意見を頂いてしめくりました。申し訳ありませんでした。

【「導入」の内容と私の考え】

導入部「IAML と公共図書館 音楽資料をめぐる過去・現在・未来」で話したことの概要を以下に略記しました。時間切れでお話し出来なかった部分も加えました（斜体）。

現況のおさらい

- ①日本にある音楽資料情報を扱う団体について
MLAJ と IAML について / MLAJ と MLA の関係 / IAML と IAML 日本支部の関係
- ②これらの 4 団体の歴史的展開について
- ③ IAML 本部組織運営の仕組みの紹介
- ④ IAML とその関係団体等

図書館と音楽図書館（MLA と MLAJ、IAML と IAML 日本支部の相互関連の歴史を軸に）
公的図書館の出現と展開（創始期）

- ①アメリカでの図書館の創立と展開 議会図書館と公共図書館
1800 議会図書館
1854 ボストン公共図書館
1886 ニューヨーク公共図書館

アメリカの書誌データ統一化（第 2 期）

- ② 1900～1980 議会図書館、書誌カードの

<p>無料配布</p> <p>③ 1931 MLA 設立 この頃図書館学成長</p> <p>④ 1951 MLA に倣って IAML 設立</p> <p>⑤ 1971 MLA に倣って MLAJ 設立</p> <p>⑥ 1979 IAML 日本支部設立</p> <p><u>電子化時代の始まりと日本の対応 (第3期)</u></p> <p>⑦ 1981 アメリカで書誌情報の目録が全面的に電子化</p> <p>国立音大 (と MLAJ) 中心に、国内の音楽資料に関する対応の検討、準備</p> <p>鳥海恵司氏・ダイソメディア (現(株)トッカータ) と国立音大の協力</p> <p>IAML 日本支部は関与せず。岸本、個人として MLAJ に協力</p> <p>国立音大とダイソメディアの協力による書誌データの共有、MLAJ 会員館に採用されず</p> <p>支部の活動、徐々に下向きに</p> <p>⑧ 1988 IAML 年次大会日本で開催と広島での電子化についてのシンポジウム</p> <p>支部活動の休眠</p> <p>⑨ 1996 支部活動再開、今日に至る</p> <p><u>グローバル時代への第一歩 (第4期)</u></p> <p>⑩ 2011.5 MLA メンバー、RDA の試行的入り開始</p>	<p>図書館技術の大転換と日本の対応</p> <p>・第4期：グローバル時代への第一歩</p> <p>規約に大幅な改定が行われた昨年は、図書館の世界が、グローバルな資料情報を扱う時代に入ったからです。RDA に加え、バーチャル国際典拠ファイル (Virtual International Authority File: VIAF) をめぐる検討など、アメリカ産の技術を基礎としたグローバルな国際協力の時代です。</p> <p>私が伝えたかったことは、以下の事でした。</p> <p>・国際組織 IAML が、アメリカの MLA を真似て作られた団体であること、</p> <p>・IAML の活動はアメリカの音楽図書館を参考に、展開してきたこと、</p> <p>・日本支部は 25 年以上も前に設立されたこと</p> <p>・本部の路線に従って、協働作業を通じた国際的な合意に向けての対話に参加し、日本国内の状況改善に努めるのが、支部本来の仕事だったのではないか</p> <p>・今からでも、少なくとも一番困っている公共図書館のために何か出来ないか</p> <p>・支部には、知恵を出し合う場を作ることがかんがえて欲しい</p> <p>・日本支部を存続させて、グローバルなデータ共有に向けての活動をするか、組織の店じまいに向けて運営するか、検討する必要はないのか</p> <p>そのためにお話ししたかったのは、主に IAML の歴史を軸とした、そしてその基礎となったアメリカの音楽図書館技術史でした。IAML の性格や過去の役割を知ること、それが、これから築かれる未来の役割の礎になると信じているからです。</p> <p>しかし、IAML と MLA の関係等、基礎的な説明なかばで、時間がなくなってしまいました。肝心の、公共図書館と方とどのような将来を語</p>
<p>私の歴史観</p> <p>私は上記の音楽資料に関する歴史的展開を、次のように捉えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創始期：議会図書館と公的図書館の出現と展開 ・第1期：書誌データの統一化 議会図書館のリーダーシップのもと、<u>アメリカ国内</u>の図書館技術の統一化へ ・第2期：ヨーロッパに伝播。IAML 設立。アジアで唯一、日本もメンバーに ・第3期：アメリカ (+ヨーロッパ) で書誌情報の目録が全面的に電子化 	

り合うことが出来るか、というトピックにはたどり着けなかったも同然でした。申し訳ないと思っています。

【本音、その後の展開？ そして、乞ひ意見】

その後、メンバーの中から、IAML とは何？、日本支部の役割は？ ということのを改めて考えたいという声も聞こえてきています。勉強会を開きたいという声も。ひょっとすると…なにかが起きるかも知れない…という気もします。

例会に出席下さった方々はどのように受け止めて下さったのでしょうか。今回は、問いかけがしたくて考えた計画が、途中で途切れてしまったという反省と同時に、出席された皆様はどのように感じられたか知りたいです。ご意見・感想を聞かせて下さいと、この場をかりて御願いたします。

ご意見・感想は岸本宛に、よろしく御願います。(chunchan@nta.pial.jp)

第 57 回研究例会 「公共図書館と音楽」傍聴記

栗林あかね
大和 紘子

爽やかな快晴となった晩秋の候、IAML 日本支部第 57 回例会は、「公共図書館と音楽」というテーマのもと、東京音楽大学付属図書館で開催された。例会前半は、吹田市立中央図書館の森万由美氏による「大阪府吹田市立図書館における音楽資料の現在」、それを受ける形で(株)トッカータの田島克実氏から、「吹田市公共図書館の音楽資料書誌データについて」が報告された。後半は、本例会の司会である岸本宏子氏からの「IAML と公共図書館」と題し

た導入部の後、場内ディスカッションへと移行して、出席者間での活発な意見交換が行われた。筆者は前半部分についてレポートしたい。

森氏は、まず吹田市および吹田市立図書館の概要について、細部までまとめられた資料をもとにはじめられた。吹田市は特例市で、1970 年の大阪万博開催地としてよく知られている。交通利便性が高く、周辺には多くの工場が存在し、市の HP からは、住まいに関する施設の充実が特にうたわれている。仕事と居住地のバランスもあり、その人口増加率は年々上昇傾向となっている。

図書館は市内 7 館 2 分室から成り、利用のための市内在住登録率はおよそ 3 割と、全国的にみても、低くはない数字であった。説明の中から、利用者が「図書館」に求めることと、行政の運営である「公共図書館」という立場による、双方の差異から起こる不具合が恒常的に発生していること、その対応の多様性と困難に対する策について論じていくことは、今後の図書館運営を考える際には不可欠であろう。筆者は、自身のこれまでの経験と現在の立場から、問題が起きた際には、図書館側すなわち運営側の立場で考えてしまうことも少なくないが、利用者の立場に立った見方について、今後は特に気をつける必要があることを実感した。公共図書館は、目に見える数字（登録者数・貸出冊数・蔵書数など）から外部評価される。これらの数字は、利用者へ寄り添った運営が行われたからといって、急激に変動があるものではなく、目に見える変化まで一定の期間を必要とする。制限がある中で、効率よく稼働させていく組織作りの必然性についても考えさせられる。研究を生業としている、あるいは同業類似職種である人々は、公共図書館、大学図書館、専門図書館あるいは国会図書館など様々な図書館を使い分けているかもしれない。だが、地元の公共図書館を利用する者の多くはどうか。彼らは、初歩

的から（本人が意図していない場合でも）専門的な相談まで、あらゆるレベルの問い合わせに対し、図書館で働く人々は「司書」であり、知りたい答えに導いてくれる、と疑っていないかもしれない。司書業務に携わる人々は肩書き関係なく、利用者の問い合わせに応じて、満遍なく対応できる機転とスキルが求められる。それに応えていくことが、やがて利用者数の増加や満足度に繋がるのではないだろうか。

音楽資料は、誰にとっても検索方法に慣れるまでが難しく、とくに視聴覚資料がそうであろう。森氏から、表記の統一がされていないゆえの「検索しにくさ」が挙げられた。電算化の発展にともなって、従来のカード式から OPAC へと形を変えた目録システムは、常に進化しており、それに合わせた対応が必然であるが、いかに新旧システム同士がうまく機能しあうことが重要かを実感させられる内容であった。利用者は、自分の探している資料がどうしたら見つかるのか、検索の際、その構造・仕組みまでを深く考えていないかもしれない。利用者が正しい（と思っている）語句で検索しても、思うように資料が探せず、それにストレスを感じてしまう、これが頻繁になることが図書館離れのきっかけにもなりかねないのは、残念なことである。しかしこれについては、スタッフ間での情報共有から、解決に向けた対応が行えるのではないだろうか。何でもマニュアルにしてしまうのではなく、例えばメモ程度、スタッフの負担にならないような、音楽資料特有の検索のコツなど記入できる情報ノートを作成する、普段からの業務上必要とされるコミュニケーション内で、必要な情報は共有するという意識など、時代に沿った組織の環境を作っていくことがますます求められるだろう。また、吹田市では IC タグ未導入のため、多くの視聴覚資料が閉架であるというが、個人的には図書館の醍醐味の一つにブラウジングが挙げられる。紛失や設置スペー



田島克実氏

スの確保など問題は多くあるが、ぜひ資料が人目に触れる機会が増えることを期待したい。

続いて（株）トッカータ（以降、トッカータ）の田島氏から、吹田市立図書館の音楽資料書誌データについてと、全国の公共図書館を中心とした書誌データについての説明がされた。冒頭では、多くの図書館と取引のある氏からみて、吹田市は非常に活発な図書館運営をされているとの説明があった。

トッカータは MARC と典拠ファイルの会社で、公共図書館や大学図書館などを中心に書誌データの提供やそれに関連する事業を手掛けており、音楽に関する書誌データの充実については、国内を代表する。森氏の発言と同様に、田島氏からも、MARC 移行時に起こるデータの整合性のむずかしさが話され、電算化によるこういった問題には終わりがなく、恒久的な課題であることを強く感じた。最後に、現在までの公共図書館の映像資料の経緯とそれにまつわる諸問題について、氏の見解が述べられた。

『『住む』『働く』『楽しむ』』といった吹田のポテンシャルを着実に高め、魅力ある都市空間を創り出そう」とする一端を担う今後の吹田市立図書館と、それを支えるトッカータに、ますますの発展と期待が膨らんだ前半の報告であった。

（栗林あかね 玉川大学教育博物館）

後半は、岸本宏子氏（昭和音楽大学教授）による「IAML と公共図書館」というテーマで「音楽資料をめぐる過去・現在・未来」についての話があった。

岸本氏は、長年にわたり日本の音楽図書館界を牽引し、様々な活動を行ってきた。自身による経験談を交え、日本の音楽資料を扱う人たちが今までどのような活動をしてきたか、またそれはどのような意義があったのか、という内容の発表だった。以下にその詳細を述べる。

1. 音楽資料をめぐる過去・現在・未来

日本には音楽資料を扱う 2 つの団体がある。MLAJ (Music Library Association of Japan. 音楽図書館協議会) と IAML (International Association of Music Library, Archives and Documentation Centres) 日本支部である。

MLAJ は、国立音楽大学が中心となり、日本の音楽資料を扱う団体として 1971 年にスタートした。当初は団体会員のみが対象だったが、後に個人会員も対象となる。一方、アメリカでは、世界に先立ち 1931 年に、MLA (Music Library Association) が設立されている。MLAJ と MLA には、直接的な関係はない。

IAML は、欧米の図書館および個人会員を対象にスタートした。1951 年にアメリカの MLA を手本にヨーロッパで設立され、その後 1979 年に日本支部が設立された。MLAJ が日本国内の音楽資料関連の活動を行うのに対し、IAML 日本支部は、世界の音楽資料関連の活動と日本を結ぶ役割を担っている。

IAML 日本支部が設立された 2 年後の 1981 年は、図書館界にとって新時代の夜明けと言われ、『英米目録規則第 2 版 (AACR2)』が出版され、米国議会図書館 (以下 LC) の全面的電子化がスタートした。1981 年前後の時期は、電子化に先立ち、アメリカ、カナダ、ヨーロッパでの協力体制など、IAML では様々なことが活

発に検討された。日本も、この時代からグローバルな対策を考えておくべきだったが、世界に比べると歩みが遅く、レベルも違っていた。MLAJ と IAML 両組織のメンバーは、個人的に公私両面で境界を越えた努力をし、この新しい時代への対応を検討したが、IAML 日本支部の活動は活発ではなく、公的に両組織が協力することはなかった。

2. IAML の今 (IAML 本部組織の運営)

IAML は以下の 4 グループにわかれている。

Committees (管理 / 統括)

組織の在り方や規約を決める "Constitution committee"、著作権について検討する "Copyright committee"、年次大会の運営について話し合う "Programme committee" など、IAML を運営していく上で重要なことを定める委員会が含まれ、LC の代表や各国を代表するライブラリアンが加わっている。

Subject Commissions (専門別)

"Audio-Visual materials commission" (視聴覚資料委員会) や "Bibliography commission" (書誌委員会)、"Cataloguing commission" (目録委員会) など、技術面を論議する専門的な委員会が含まれる。

Professional Branches (館種別)

"Archives and Music Documentation Centres" (文書館とドキュメンテーションセンター)、"Broadcasting and Orchestra Libraries" (放送局とオーケストラの図書館) など、館種ごとの部会が、各々の問題点について相互に情報交換を行う。

Working groups (作業グループ)

委員会まではいかないが、調査が必要なが出た時など、特定のトピックを短期間で決めるために臨時的に開かれるグループ。

IAML と関連する国際機関には、IFLA (International Federation of Library Associations)、音楽資料に関わる IASA

(International Association of Sound and Audiovisual Archives)、IAMIC(International Association of Music Information Centres)、そして音楽学の IMS (International Musicological Society) などがある。この中の IMS と協力し、R-Projects とよばれる音楽資料の目録作成に取り組んでいる。RISM (The Répertoire International des Sources Musicales) はその成果の一つである。

3. 1980年代の日本における音楽資料に関わる動向

1985年 公共図書館向けに『音楽の基礎資料』を出版(岸本氏、佐藤みどり氏)

1986年 学術情報センター(現・国立情報学研究所)設置

1987年 NCR(日本目録規則)1987年版出版、学術情報ネットワーク運用開始

1988年 IAML日本大会開催

1989年 学術情報ネットワーク、LCと接続(音楽資料のデータ取り込み成功)

以上の流れの中で、IAML、MLAJ 両組織の境をこえて活動してきたメンバーは、世界に追いつこうと活動していた。分類法に関しては、従来の概念とは大きく異なるファセット方式が適用された「DDC20版」に基づく、日本版音楽資料分類法を構築した。ファセット方式を適用したのは、音楽資料の特殊性を考慮したためである。この分類法は、グローバルスタンダードを意識し、日本でも使えるような形に作られたが実用化はされなかった。現在は、トッカータ社の目録データベースで参照できるのみである。

4. 日本と欧米の違い

アメリカでは1900年から(1981年まで)LCが目録カード(音楽資料含む)を各図書館に無料で配布していたことからわかるように、図書館の統率が図れるような国の事業が行われていた。

一方日本では、本来なら国家レベルで行う

べき事業である音楽目録の作成を民間の会社が行い、公共図書館へ提供してきた。1980年代の日本の図書館は、各館が独自の方法を採用し、統一された目録、合理的な目録作業といった概念がなかった。1990年代に入り、MLAJが音楽図書館の目録ネットワーク立ち上げを呼びかけたが、参加したのは国立音楽大学の1館だけだった。

ここで、岸本氏の留学時代の貴重な話があった。岸本氏は、1968年にアメリカに留学し博士課程でイタリア、ルネッサンスの研究を行っている。論文作成の資料収集のため渡欧し、様々な図書館をまわり、日本の図書館と欧米の図書館が大きく異なっていることを痛感した。1975年に帰国し、日本で研究を続けようとした際、日本における資料、情報の流通の不便さに落胆した。日本の研究者のための情報流通を促進する必要性を感じ、1978年に図書館情報学を学びにアメリカへ再留学した。前述した図書館界にとって新時代の夜明けの年であった1981年前後には、IAMLの目録や典拠を扱う様々な委員会やR-Projectsにも関わっていた。

この留学時代に特に貴重な経験となったことは、Boston Public Libraryにて、目録の電子化に携わったことだった。また、Harvard Universityにて、アーカイブ・オブ・ワールド・ミュージックの事業でテープやLPの音源を聴いて目録を作成したことだった。

5. 意見交換「どうすればできる? 夢の公共図書館」

主な意見は次のとおり。

- ・公共図書館では、館によって使用するMARCデータが違い、データの情報量に差がある。データが多くなればなるほど利用者の要求は細かく、高くなる。

- ・今まで公共図書館の話は、IAMLではあまり出なかった。音楽が公共図書館の中で位置づけられるというレベルにはなっていない。国立

国会図書館の音楽資料室の多くは AV 資料で、私立の音楽大学図書館で使っているようなレファレンスツールはない。

・IAML 国際大会に参加して、国立図書館・公共図書館の参加が多いことに驚いた。今回、IAML がなぜ設立されたのかなど、知りたかったことを聞くことができた。引き続き、色々な機会に IAML がどのように活動していったら良いのか、教えていただきたい。今回、これほど多くの図書館関係者の参加があったことは喜ばしいことである。

6. まとめ、所感

アメリカでは、目録カードの無料配布を行っていたように、合理的かつ統一的な方式が確立されていた。一方、日本では館独自の方式が確立され、共通の目録という考えは受け入れられなかった。日本の図書館においても、今後はシステムやデータなどが統一されるべきである。

今回の例会では、今後の日本の音楽図書館の方向性、求められる役割について問題提起がなされたように感じる。今後、幅広い世代の人が IAML の活動に参加し、グローバルな視点で図書館や音楽資料について考えていく必要がある。その第一歩として、IAML の今までの活動について共有できたことは、有意義だったのではないだろうか。

長い歴史の中で実行が難しかったことも、クラウドサービスなどの技術的革新によって、現代では実現可能になったことがあると思う。今回の例会は、IAML 設立当初から活躍されているメンバー、音楽資料を日頃から扱っている図書館員、音楽大学で司書課程を履修している学生など、幅広い方々の参加があり、テーマに対する高い関心や活力が感じられた。今こそ、幅広い層のメンバーが協力し、グローバルな対策に取り組むべきではないだろうか。

(大和紘子 昭和音楽大学附属図書館)



事務局だより



総会・例会のお知らせ

来る 6 月 6 日 (土)、支部総会並びに第 58 回研究例会が東京音楽大学付属図書館で開かれます。例会には会員以外の方の参加も歓迎です。多くの方々のご参加をお待ちしています。

総会 13:00-14:00

第 58 回研究例会 14:15-16:30

「IAML 日本支部の課題」 荒川恒子 (支部長)

「玉川大学教育博物館における音楽資料—ガスパール・カサド及び原智恵子関係資料を中心に」 (仮題) 栗林あかね (玉川大学)

「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」データベースが国立国会図書館のサイトで公開

DB「近代日本刊行楽譜総合目録 洋楽編」(日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会編)が 3 月 24 日より国立国会図書館サイトで公開されている。<http://rnavi.ndl.go.jp/score/>

本 DB は、国立国会図書館ならびに全国の図書館等 159 機関が所蔵する、1945 (昭和 20) 年以前に日本で出版された楽譜の総合所在目録である。収録データ数は書誌データ約 11,300 件、所蔵データ約 18,300 件。上記調査委員会が文化庁委託事業として実施してきた調査研究の成果であり、わが国最初の楽譜全国書誌作成の試みとして注目される。(詳細次号)

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 53 号

2015 年 5 月 25 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5

東京音楽大学付属図書館内

<http://www.iaml.jp>